

04・朝からオナニー告白されて、ぬるぬるおま●こについて解説させてから指ハメガチセックスで連続絶頂させてあげる

『03・【耳舐め】おやすみ前のあまあま耳舐め手マン』の翌日の土曜日、朝六時ごろ。天気は晴れ。気温も心地よいあたたかさで、とてもよい春の朝だ。

場所は主人公の自宅内寝室の、ベッドの上。

主人公、イヴの隣で、すびすびと気持ちよく眠っている。

しかし、外が明るくなってきた頃、ようやく目を覚まし、もごもごと動き出した。それから、横になったまま、くーっと伸びをして……昨日の出来事を辿ろうと、頭を巡らせる。

〈主人公〉

「ふわぁ……」

あー……よく寝たなあ。もう土曜日なあ。

——それにしても、昨日はよかったなあ。

飲み会は色んな学校の先生が居たからちよつと不安だったけど、無事に終わって。

タクシーの運転手さんは優しくて。

マンション着いたらイヴちゃんが待っていてくれて。

変装イヴちゃんかわいくて。

それから二人で一緒に帰って。

その後は、一杯甘えさせてもらって。

玄関でおっぱいちゅうちゅうさせてもらって。イかせてもらって。

お風呂入って。お風呂ではお返しにたくさん色々してあげて。

寝る前も、お布団でもすごい気持ちよくしてもらって。

とにかく素晴らしい夜の記憶はそこで途絶え、そこから先の事が、何も思い出せないの

あとそれから、それから……。

んん？

えーっと。……あれ？

主人公、布団の中で『おや？』と首をかしげる。

最高に素晴らしい夜の記憶はそこで途絶え、そこから先の事が、何も思い出せないの  
ある。

主人公はイヴとした事なら、どんな事でも記憶している自信がある。

だが昨夜に関しては、ここまでしか覚えていない。

という事は、もうそこから先は特に何もなかったという事だろうか？

うーん。

うーん。うーん。

……覚えてないな。

多分、お布団で気持ちよくしてもらって、そのまま寝て、今起きたって事だよね。  
……で、いいんだよね？

SE1 イヴが布団をめくる音

【最初から最後まで流す】

と、主人公が不安な気持ちになっていると、イヴがこちらに気づいたようだ。  
主人公が起きたかどうか確認すべく、こちらを覗き込んでくる。

●中央 至近距離

「とても甘々で、浮かれた感じで。

これから一日中、主人公と過ごせる事が嬉しくてたまらない」

あー♥ 起きたあ♥

おはよ。先生♥

【※3回※ キスする。

甘々に『いかにもキス』という感じの音を立ててキスする】

ちゅ♥　ちゅ♥　ちゅっ♥」

〈主人公〉

「おはよう♥

わく♥　イヴちゃんだく♥」

SE2　二人が布団の上で抱き合う音

【最初から最後まで流す】

主人公、記憶があいまいな事をさっそく忘れ、イヴに抱きついて甘える。

昨日の出来事は一部はつきりしないが、とにかく一杯イヴに優しくしてもらった事は覚えてる。

幸せだった。あれもこれも、最高に良かった。

ああ、年下ママ系彼女最高……♥

そんな事を思いながら、抱き合ってごろごろする。

対するイヴも、相当にご機嫌のようだ。

朝からハイテンションである。

●中央 至近距離

「うきうきと浮かれて。いかにもバカツプルという感じの会話を楽しむ」  
「そうだよ。イヴだよ♥」

イヴ、くすくすと楽しげに笑いながら、主人公の左耳にささやく。

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「ひそひそと嬉しそうに。」

これが真相で、のちの発言とは矛盾する事になる」

ねえ。先生すごいね。めっちゃ寝てたよ♥」

〈主人公〉

「あらっ。今何時？」

という事は、昨日はやっぱり、お布団えっちの後から夜明けと思われる今まで、ずっと寝てたって事でいいのかな？

いや、それとも逆に『めっちゃ寝てた』って言われちゃうほど、めちゃくちやに寝てた？て事は、今ってお昼過ぎの可能性もある？

……とりあえず、時刻の確認をせねば。

主人公、イヴの『めっちゃ寝てた』という言葉に、納得したような、驚いたような、とにかく混乱した気持ちで、ひとまず時刻を尋ねる。

するとイヴは、特に時計を見る事もなく、そのまま答えを教えてくれる。

まるで、今がおおむね何時かわかるほど、ずっと起きていたような感じである。

### ● 中央 至近距離

「さらっと、すんなり答える。

時計を見なくても、時刻をおおむね把握している」

んー？ えっとね ♡

まだ六時とかだよ。

土曜でよかったね ♡ まだまだ寝れるよ ♡」

〈主人公〉

「六時、かあ……」

あ、そおなんだあ……。とりあえずお昼過ぎではなくて良かったあ……。

主人公、頷き、寝すぎてはいない事に安堵しつつも、いまひとつピンと来ない。  
寝る前の記憶がすっぱ抜けているせいで、それほどまでの時が過ぎた実感がないのだ。  
その結果、なんだかまるで、ごく短いタイムワープをしたかのような気分になる。

●中央 至近距離

「だんだん近づいてくる」

んー？

【ゆっくりと。語尾はあまり上げない】

もしかして、昨日の事、あんま覚えてない？」

なぬ！

もしかしてやっぱり、わたし、何か忘れてる事があるのかな!?

なので主人公は、イヴの口ぶりに『やはり……？』と身構える。

とはいっても、大した事はしていないはずだ。

だが、記憶がないという事は、思った以上に不安になるものである。

主人公が続きを聞こうとおそろるおそろる身を乗り出すと、イヴはまるで、決して人に聞かれてはならない話を始めるかのように唇を耳に寄せ、ひそひそと話し出した。

● ● 左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「ここから※マークまで、ゆっくりと、ひそひそと、大変な内緒話をするように話す」  
あのね。

「一呼吸あけてから。にやにやと。

これからあからさまな嘘について、主人公をびっくりさせようとしている」  
凄かったよ？

「一呼吸あけてから。にやにやと。

ひそひそと嬉しそうに、ありもしないセックスエピソードを捏造し始める」  
昨日はね。夜も一杯したのに。夜中ももつとしたよ。

私が泣きながら

「ここから」でくくった部分は、イヴの作り話。



しかし『』の部分も、ほぼ普段の口調で、いつも通り読む。

本人的にはえっちな嘘喘ぎをして主人公をドキドキさせようとしているが、演技の才能がない上、普段の話し方が平坦すぎて嘘喘ぎとは相性が悪い。

結果、わずかに『わざとらしい』『嘘喘ぎっぽいかも』と思える程度で、ほとんどいつもと同じ口調になる。

しかし主人公には、かえってそれが『本当の事を言っているのかも!』と感じる根拠となる」

『もう無理♥ もうイくのやだあ♥』って言っても全然やめてくれなくて。

『シャワーの時はシャワーで』『シャワーから戻る時は廊下で』と、二回えっちな事をされているという意味」

シャワーの時も、シャワーから戻る廊下でもえっちな事してきてさあ。

『せめてベッド行こ?』は、少しだけ甘えて、懇願しているような感じで」

『せめてベッド行こ?』ってお願いしても無視で。

廊下の壁に手えつかせて。

立ちバックで私のナカ、ぐちゅぐちゅしてきてね?」※

〈主人公〉

「……………」

主人公、衝撃の告白をされて、ごくりと息をのむ。

イヴちゃんの事を、イヴちゃんの都合お構いなしで犯しまくるわたし……！  
わたし……し……？

………？ ……？？

……果たしてそれは、本当に現実起きた事なのだろうか。

主人公、普段の自分とはずいぶんとかけ離れているエピソードに、思わず首をかしげてしまう。

だが、昨日は酔っていた。正気ではなかった。

だからもしかしたら、条件が整えば、それ位の事はする可能性はある。  
なので主人公は、とりあえず想像してみた。

酔ってタガが外れている自分と、そんな自分にめちゃくちゃにされているイヴ。

それから、繰り広げられる、主にアダルトフィクションの世界に生息しているような激しいセックスを。

それはどんなに緻密にイメージしても想像の世界を飛び出す事はなく、記憶とは、まるで結びつかない。

だが、こう見えてイヴは、そういうプレイが大好きだ。

本人はバレてないと思い込んでいるのだろうが、校内で友人とこそそえつちなコミックを貸し借りして楽しんでは、鼻息をふんすふんすさせている事を、主人公は知っている。つまり、むつつりなのである。

だから身に覚えはないが、もし昨夜イヴから『そういう事をしてほしいオーラ』を感じとったならば、主人公は応じていた可能性がある。

だからそうなった事自体は問題ない。むしろ、そんなおいしい展開を、当事者である自分がまるで覚えていないという事こそが問題である。

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「※1回※ 耳にキスする。

作り話を聞かせているだけなのに、もう興奮してくる。

また、主人公が真に受けて早速ちよつと興奮した様子なのが嬉しい」

ちゅ♡

【少しだけ甘々に、主人公をえつちに非難するような感じで。

しかし、話している内容はもちろん嘘である】

すぐそこ玄関なのに。外と、ドア一枚しか隔ててないのに。

私、何回も何回も犯されて。

『『あんあん♥ あんあん♥』はちよつと演技を頑張る。  
多少はわざとらしく、嘘喘ぎらしくなる』

『あんあん♥ あんあん♥』 って鳴かされたんだよ♥」 ※

〈主人公〉

「……………!?!」

えっ！ いいなあ！ それ！

立ちバツクで犯されてるイヴちゃんはやばい。

絶対可愛いし、絶対えっちに決まってる！

主人公、ますます興奮してくる。

どう転んでも、イヴをめちやくちやにする自分の事はうまく想像できない。  
だが、めちやくちやにされているイヴが絶対に可愛いという事はわかる。

主人公は想像する。

主人公に腰をしっかりつかまれ、逃げる事もできずに指を深く押し込まれて。  
かと思いきや、何度も、何度も、容赦なく出し入れされて。

目を潤ませ、恨めしそうなフリをしながらも、どう聞いても嬉しそうな、高く可愛い声であんあん喘ぐ、イヴの姿を。

それから、

そんな素晴らしい出来事を覚えていないなんて、なんてもったいない……！

ああ、やっぱりだめだ。お酒はダメだ。今度こそ絶対にやめよう。

いや、お酒を飲んでいたからこそそんな展開になったのかも？

と、すっかり話を真に受けて、妄想をさらに広げていく。

この話にはどうも現実味がない事よりも、えっちなストーリーとして興味をそそるという事に、完全に注意が行ってしまったている。

● ● 左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「語り口がノってくる。にやにやと。」

作り話をしているうちに、あたかもそれが本当にあつた出来事かのような気がしてきた。

また、自分が普段しているえっち妄想を主人公に打ち明けるのは、なんだか幸せな気分」

先生、すっごい意地悪だった。

私の弱いところばっか、ねちねちいじめてきてさあ♥

「ぼそっと。昨日の『お風呂での』セックスを思い出しながら話している。

これは本当の事なので、作り話にも、急に真実味が増す」

まだお腹の奥、熱い感じするもん。

【多少は演技がうまくなる。

ノリノリで嘘喘ぎするが、それでも『多少』程度の上達である」

先生、ちゃんと私が『好き♥ 先生好き♥ イく♥ イくイくイく♥ イつくう……

♥』ってガチイキしたの、覚えてる？」※

〈主人公〉

「嘘……♥ やばいじゃんそんなの♥」

主人公、さらに激しく興奮してくる。

い、今からでもそれしたい。

もう一回イヴちゃんと、そういう濃厚系えっちしたい……！

と、強い欲望がむくむくと沸き上がり、はあはあと呼吸が荒くなってくる。  
イヴもまた、そんな主人公を見てご機嫌、かつ発情気味のようだ。

とろけた瞳で、主人公をにやにと、嬉しそうに見つめてくる。

イヴ、主人公の顔を見るために、一度正面に戻る。

●中央 至近距離

「※ひそひそ声※」で。

「少しにやにと。普段通りの口調で話したいが、もうにやにやが止まらない」  
「そうだよ？ やばいよ？」

「なのに覚えてないの？」

「一呼吸おいてから。」

『まさか、信じてないなんて事はないよね？』という感じで  
「もしかして、嘘だと思った？」

〈主人公〉

「それはあ……♡」

にわかには信じがたい話だったが、もはや真相はどうでもよかった。

朝からイヴが、いかにもえっち目的の、えっちに誘導するための話題を振ってきた。

主人公はそれが嬉しいし、ぜひともこのままこの誘いに乗って、セックスがしたい。それ以外の事は、すでに些事なのである。

●中央 至近距離

「一呼吸おいてから。

しれっと。あっさりと、だが嬉しそうに」

そう。嘘♥

【※1回※】キスする。

嘘をついた事をキスで誤魔化すようなキス。

だが主人公は、イヴの作り話を聞いているうちにすっかり乗り気になっている」

ちゅ♥「

〈主人公〉

「やっぱりい……♥」

だから、嘘だと告白されても、何の影響もない。

問題は『なぜイヴがそんな嘘について、これから主人公をどうさせようとしているのか』という事だけだ。



どう考えても理由は一つだが、万が一そうでないという可能性もある。

とにかく早くそのへんをはっきりさせて、えっちしたい。

早くイヴちゃんといちやいちやしたい！

そんな思いに、主人公は満たされていく。

### ●中央 至近距離

「にやにやと嬉しそうに。」

主人公が『まずは驚く。それから、興奮したようにもじもじ、にやにやとし出す』という、理想の展開になってきたので」

ふふふふ ♡ 全部今思いついた妄想。

【※1回※】 キスする。

完全にセックスに誘っているキス。

作り話を聞かせているうちに、セックスしたくてたまらなくなってきた」

ちゅ ♡

【悪びれもせず、真相を話す】

ほんとは先生が覚えてる通りだよ。

先生は昨日、玄関でイツたりますます甘えん坊になって♡  
お風呂入った後、私にお布団でお耳氣持ちよくされて、そのまますぐ寝ちゃったよ。  
で♡今起きたの」

〈主人公〉

「そうだったのかあ……♡

……なんかおかしいなあと思ったけど、やっぱり嘘だったんだあ……♡」

だが、万一の可能性については考えなくてもよさそうだ。

イヴは相変わらずいやらしい単語を連発してこちらを煽ってくるし、同時に主人公の髪や手に触れて、いちいち欲望を刺激してくる。

主人公はこのままにやにやと焦らされながら、時が来るのを待つだけでいいようだ。

●中央 至近距離

「【とても嬉しい。主人公が自分の嘘に怒るところか、むしろ嬉しいそうなので】

はは♡ 残念がつてる♡

【にやにやと嬉しそうにたずねる】

そういうの、本当にしたいと思った？」

〈主人公〉

「思った♥　なのに現実には寝てたなんて、情けなさすぎるよ♥

ごめんね。淋しかったでしょう。

あのね、だから今日はそのお詫びに、何でもしたい事してあげる。

一杯いちゃいちゃしたり、遊んだりしようね♥」

●中央　至近距離

「わかりやすく声が弾む。言質を取った気分」

ほお♥」

その時、イヴの瞳がわかりやすく輝いた。

主人公は知っている。これが言質コレクター、イヴの本領だ。

主人公はこれから、この言葉を盾に、本当に一日中、本当に色んな事をさせられるだろう。

主人公自身、それを承知の上で発言しているのだから、手に負えない二人だ。

なので主人公はノリノリで、さっきまでよりもますます甘いトーンで返事をしてみた。

〈主人公〉

「そうだよ。いくらでも甘えていいからね♡」

●中央 至近距離

「にやにやと嬉しそうに。」

へへえ♡

「にやにやと嬉しそうに。」

当然のように、主人公が特に許可していない『今日はそういうのしてもいい』『先ほどの妄想のような、激しいセックスをおねだりしてもいい』という事項を追加する」

寝ちゃってたお詫びに、今日は本当にそういうのしてもいいし、いくらでもイチヤイチヤしたり、甘えたりしてもいいの？

何でも言う事聞いてくれるの？」

〈主人公〉

「うん♡」

そう。本当にいくらでも甘えていいのだ。

たくさんわがままを言っているし、他の人にはとても頼めないような事も、主人公には

頼んでいいのだ。

だって主人公は両想いになった日、イヴにこう言った。

『外では当面恋人らしい事ができない分、家では我慢しなくていい』と。

その結果、イヴはこの半年でますます素直になって、ますます正直に欲望を打ち明けてくれるようになった。

主人公はそれが可愛いし、いとおしいし、イヴにはずっと、今のようのにのびのびとしていて欲しいと思っているのである。

……まあ、イヴの願いが想像以上にえっち方面メインだったために、ごくピュアな恋愛をしていたはずの自分達は、ずいふんと様変わりした。

具体的にはすっかりセックスしまくりのえっちなカップルになってしまったわけで、これに関しては、かなり想定外だったが……。

主人公は幸せだ。また、イヴもきつと同じ気持ちでいてくれると思っている。

### ●中央 至近距離

「【にやにやと独り言のように。言質をとれて、とても嬉しい】

そっか。そうか。そっか……♥

【甘えた声で。

だんだん顔を近づけながら話しているイメージ】

それって……。

【※1回※ キスされる。軽く唇を重ねられる。

顔を近づけて話していたら、そのまま頬に手を添えられてキスされるイメージ】  
ん♡」

主人公、物欲しげに顔を寄せてくるイヴを引き寄せて、キスをする。

●中央 至近距離

「★【※20秒※ キスする。

朝から濃厚な『それじゃあ、今からセックスしよ♡』と誘っているようなデープキス】

★★★

ん♡ ん♡ ふ♡ んっ♡ んー……♡ れろっ……くちゅ♡♡ ちゅるっ……ぷちゅっ

♡ れろっ♡ れろっ♡ くちゅっ……♡

【唇を離す音を、露骨に立てる】

ちゅるっ♡

【※2回※ ゆっくりと呼吸する。興奮気味に】

はあ……♡ はあ……♡

【少し間をあけてから。

にやにやと嬉しそうに」  
「こんな風に？」

〈主人公〉

「そう♡ こんな風に♡」

それからぎゅっと抱きしめて、仲よく布団にくるまる形でじゃれ合う。

●中央 至近距離

「上機嫌で笑う。ものすごく嬉しい」

ふふふふ♡

「甘ったるく喘ぐ。」

不意打ちで少し驚くが、ものすごく嬉しい」

あ♡

「※3回※ キスされる。短いながらも、しっかり攻められるキス」

んー♡ んっ♡ ふ♡

「高く甘く喘ぐ。とても嬉しい。」

主人公が当たり前のようにお尻を触っているの」

あ♡ ひゃ♡

【少し間をあけてから。

甘々に抗議する。本当は、もちろん触ってほしかった】

てか先生、もお尻触ってるし……♡」

主人公、イヴのお尻に手を伸ばすと、太もものさらさらの感触と、ぱんつごしのお尻のすべすべした感触を、交互に堪能する。

イヴはぱんつこそ穿いているものの、パジャマの下は穿いていない。

寝る時は穿いていたはずだから、主人公が起きるまでの間、何をしていたかはお察しだ。なぜならイヴは性欲が強い。

具体的には、さつきからもじもじと主人公に股間を擦りつけてきており、えっちにお尻をふりふりしている。

おそらく無意識なのだろうが、その無意識はちよつと卑猥すぎる。

ならば、そんなお尻は触るのが当然だし、これから、なぜかクロツチの部分だけ妙に滑りが悪く、湿っている事を指摘しなくてはならない。

イヴは、こちらが疲れている時、弱っている時は優しいママになってくれる。

だが、こちらが元気な時は、遠慮なく甘えて性欲をぶつけてくる、すけべ女子である。主人公はそのギャップがたまらない。



ママなイヴには甘えたいし、すけべ女子の時のイヴの欲望には全部応えたい。  
だから後者になっている今は、求められる事にはすべて応じて、イヴを昨日よりもさらにえっちな女の子にするまでやめないのが、恋人としての務めだと思っている。

〈主人公〉

「イヴちゃんだって、おまんこ擦りつけてきてるじゃん♡ えろー♡」

●中央 至近距離

「甘々に媚びた声で。バレバレの嘘をつく」

え？ 私は擦り付けてないし。もぞもぞとかしてないし♡

「甘々に媚びた声で。明らかにセックスしたがつている様子で」

別にえっち、したくないから♡」

〈主人公〉

「そうなの？ わたしはしたいけどなあ……♡」

だから主人公は、バレバレの嘘も今は指摘しないでいてあげる。

あくまで『どうしてもセックスしたいのはわたしです』というていで、イヴにセックス

のおねだりをする。

イヴは信じられないほど性欲旺盛なくせに、妙な所で恥ずかしがる。

ゆえに主人公は、そんな彼女が、好きなように行為に熱中できるように、手伝ってあげるのが正解なのだ。

### ●中央 至近距離

「あからさまに嬉しそうに。

誰が聞いても『私もしたい♥』と言っているようにしか聞こえない感じで」  
え？ 先生はしたいの？

「にやにやと。

主人公を『変態』『エロい』とからかう事で興奮したいし、じゃれつきたいだけ』  
変態。朝からエロすぎ♥

★【※10秒※ キスする。

『イヴちゃんだって本当はしたいんでしょ♥』と言われているようなキス」★  
ん♥ ん♥ んー♥ ふ♥ ん♥ んう……♥

【※3回※ 少し荒い呼吸をする。

だんだん興奮して、期待している」

ふー。ふー。ふーっ……♥」

そんな主人公に煽られて、イヴも相当昂ってきたようだ。  
だんだん呼吸が荒くなり、目がとろんと据わってきている。  
それから、そろそろ何かの頃合いだと感じたのか……少し恥ずかしそうに、でも言いたくてたまらない様子で、こんな事を打ち明けてきた。

●中央 至近距離

「媚び媚びの甘えた声で。もじもじと。」

主人公が起きてからずっと、いつ伝えよう、いつ伝えようと思っていた事を打ち明ける。  
主人公相手なら、どんなえっちな話題でも我慢せずに話せるのが、とても嬉しい」

あのね♡

【※1回※】 キスする。

完全にセックスに誘っているキス。

作り話を聞かせているうちに、セックスしたくてたまらなくなってきた」

ちゅ♡

【媚び媚びの甘えた声で。少し恥ずかしそうに。

主人公相手なら、我慢しなくていいのがすごく嬉しい」

ほんとは♡

【※1回※ キスする。

完全にセックスに誘っているキス。

作り話を聞かせているうちに、セックスしたくてたまらなくなってきた】

ちゅっ♡

【少し恥ずかしそうに、もじもじと】

昨日あんなにしたのに、全然足りなくて」

SE3 イヴが主人公に近づく音

【最初から最後まで流す】

イヴ、主人公の左耳に唇を寄せると、そのまま、ひそひそとささやく。

●●左 ささやく ※マークのセリフまでささやく

【媚び媚びの甘えた声でささやく。とても恥ずかしいが、言いたくてたまらないし、言えば主人公が喜んでくれるだろう事を理解している。

『してたの』とは『オナニーしてたの』の略】

一人でしてたの……♡

【少し間をあけてから。

媚び媚びの甘えた声で。

本格的にえっちな気分になってきたのもあり、先ほどよりわずかに演技できるようなっている」

さっきみたく『あんあん♥ あんあん♥』ってしながらね？

寝てる先生の顔見ながらイツたよ？

【媚び媚びの甘えた声で。

少し恥ずかしそうに。

これまでもさんざんえっちな発言をしていたのに、ここにきて急に恥ずかしがる」

今もね。自分で勝手にエロい事言って、勝手にエロい気持ちになっちゃった……♥」※

SE4 イヴが服をたくし上げる音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「……………♥」

イヴ、言い終えるなり、パジャマにしているTシャツを自分からまくり上げ、何もつけていない乳房をさらす。

すでに乳首は勃起しており、固く盛り上がっている。

だが、主人公がこれに目を奪われている間に、イヴはたたみかけるように誘惑してきた。

●中央

「媚び媚びの甘えた声で。

ほら見て……♡

【少し恥ずかしそうに。

『してもらえる』とは『触ってもらえる』という意味】

すぐ先生にしてもらえるようにちゃんとノーブラ、だし。

ばんつも。ほら」

SE5 イヴが足を開く音

【最初から最後まで流す】

●中央

「媚び媚びの甘えた声で。

こんなぬるぬるになってるよ……♡」

主人公、そんなイヴの姿に激しく欲情しながら、生地が濃く変色するほど濡れそぼった、イヴの股間を凝視する。

だって、一度はあきらめようとした元片想い相手が、恥ずかしい部分を、自分を興奮させるために露出して。

その上、甘ったるい声で濡れ具合を解説しながら見せつけてくるのだ。

そんなものは絶対見るし、昨日もこれと同じ光景が繰り返られていた事を思うと、イヴの事が可愛くてたまらなくなる。

つまりこうする事は、イヴの必勝パターンなのだ。

主人公、思う。

——あー、イヴちゃんかわいい。かわいいよお……。

こんなのダメだ。こんなの、朝から指ハメずばずばセックスの刑だ。

……ていうかもう、イヴちゃんって子はさあ。

えっちしたくなったら、すぐこうやっておっぱい見せてくるんだよなあ！ 昨日もそう

だった！

おっぱい出したり、ぬれぬれおまんこ見せたりしたら、わたしが喜んで飛びついてくると思ってるんだよ。飛びつくけど！

まったくイヴちゃんって子は、えっちの誘い方がゴリ押しすぎる。

何が何でもえっちしたさ過ぎて『こうすれば絶対勝てる』って方法を、平気でガンガン連発してくる。

そのワンパターンさと必死さが可愛すぎて、いとおしすぎて。

わたしはなんでもしてあげたくなっちゃうよ……。

と。

● 中央

「高く甘い声で、びくっと喘ぐ。指の腹で、さっそく乳首をなぞられたので」

あ♡  
「

〈主人公〉

「ほんとだ。ガン勃ちじゃん♡ えっちすぎ♡

まだ触ってないのに、もうぶくっつけてしてる♡」

だから主人公は、まだまだ欲望をコントロールしつつも、ストレートに応じて、意地悪を言ってる。



期待に膨れ上がったいやらしい乳首を、正面から指先でつついてやる。

……何がえっちって、イヴちゃんのおっぱいは、乳輪が大きめなのがすけべすぎる。

おっぱいの大きさと乳輪のおつきさは、ある程度比例するらしいけど……。

イヴちゃんのクールな見た目に、Ｔシャツがばんばんに張るほどの巨乳と、淡いピンク色のデカ乳輪の組み合わせは、ちよつとえっちすぎるんだよね。

こんなの他の誰にも絶対見せたくないし、生涯わたしが独占しておきたい。

……本気でそう思っちゃうよ……♡

### ●中央

「※３回※ 荒い呼吸をする。」

めちやくちやに興奮して、期待している」

ふーっ。ふーっ。ふーっ……♡

「少し恥ずかしそうに。露骨に興奮した呼吸になってしまった事が恥ずかしい」  
へへ……そうだよ♡

「嬉しそうに。えっちに指摘されたのが嬉しい。」

胸を張っておっぱいを見せつけながら、さらに主人公をあおる。

イヴは主人公におっぱいで遊ばれて、お乳しぼりごっこやエロマッサージごっこされる

が大好き。それらは毎回、ほとんど自分からおねだりしてしてもらっているようなものなのに、やはりあたかも、主人公が悪いかのような言い方をする」

勃っちゃってる。

私の乳首。お乳出ないのに先生が毎日吸いまくったり、引っ張って、びゅっびゅってする真似したり、毎日エロいマッサージとかしまくるからさあ……♥  
普通に寝てて、シーツに擦れただけで勃っし」

〈主人公〉

「へーえ♥」

●中央

「低く、小さな声で喘ぐ。

話をする最中にも、くりくりと指先で乳首をいたずらされるので」

あ♥

【甘く切ない声で。もうすでに、とても気持ちいい】

こんな風にすりすりってされたら。すぐガチガチになっちゃうの……♥」

〈主人公〉

「そうなんだ♡　ほんと、どすけべおっぱいだね♡  
大丈夫？　ちゃんと日常生活送れてる？」

● 中央

「高く甘い声で喘ぐ。

主人公がしゃべりながら慣れた手つきで、今度は親指で、ぐりぐりと乳首を押しつぶし、乳房に押し込んでくるので」

……あ♡　あ。あ♡

「ものすごく感じてしまう」

ああっ……♡」

〈主人公〉

「ほんとガツチガチ♡　こんなに硬くなるとかあるの？」

主人公、たった今胸の内側にたっぷり押し込んであげたはずなのに、もう元の形に戻って、それどころか、先ほどよりもさらに勃起しているイヴの乳首を、さらに言葉でいじめる。

主人公はイヴと付き合うまで、さほど胸には執着してこなかった。

大きさを問わずセクシーなものだとは思っていたが、こんな風に積極的に見たり、触ったりする事はなかった。

でも今では、好きで、性的魅力を感じすぎて困るほどのものになった。

だって、ここを優しく触ったり、少しだけ力を入れてつまんだり、ぐりぐりするだけで、好きな子がこんなに喜ぶのだ。

いつの間にか注目するようになって、大好きになるのは当たり前だと思った。

## ● 中央

「照れ笑いして。意地悪を言われているのに、すごく嬉しい。

主人公にえっちないたずらをされたり、意地悪に言葉攻めされたりする事がたまらなく幸せ」

へへ。硬くてやばい、でしょ。

「とても高く、聞き取りにくくなるほどの声で喘ぐ。

再び勃起上がった乳首を、今度は優しく丁寧にカリカリされたので。

意地悪な言葉と優しい手つきのギャップに、めちゃくちゃ感じてしまう」

あ……っ♥ カリカリされるの、やばいよ……♥

【高い声でゆっくり、静かにガチ喘ぎ。

日常的に乳首いじりをされていて、快感に耐えて長い時間楽しむ事に慣れている感じ】

あ。あ。あ。

【高く甘い声で喘ぐ。

特に気持ちいい愛撫をされたので】

あ♡

【※3回※ 早く、荒く呼吸する。

ものすごく興奮しており、これを抑えようとするが、うまくいかない】

ふーっ♡ ふーっ♡ ふーっ♡

★【※15秒※ 喘ぐ。

あまあまに可愛く、大喜びで喘ぐ。主人公にたっぷり乳首を愛撫されてとても気持ちい

い】★☆☆

あ♡ や♡ あーっ……♡ ん♡ ん♡ あ……♡ あ♡ あ♡ うっ……♡

【※1回※ ゆっくり、荒く呼吸する】

はー……♡

【低い声でとろとろになりながら話す。

あまりの気持ちよさに、すでに『主人公が好き』と『気持ちいい』以外の事が考えられなくなってきたいる】

せんせえ……すっごいいい……♡

【ほとんど泣きそうになりながら】

おっぱい気持ちいいよう……♡」

〈主人公〉

「ふふ♡ イヴちゃんめっちゃ可愛い……♡ おっぱいしながらちゅーしよ♡」

●中央

「【※1回※】 キスする。ちゅぽとした、甘々なキス」

ちゅ♡

★【※15秒※】 キスする。

遠慮なしにむさぼられる意地悪なキスに、めちやくちや興奮しながら応じる】★★★

んっふ♡ んっ♡ んー♡ んん♡ ん♡ んー……♡ んー♡ んー♡ んー♡ んーっ

……♡

【※3回※】 早く、荒く呼吸する。

ものすごく興奮しており、これを抑えようとするが、うまくいかない】

はっふ、はっふ、はっふ……♡

【※3回※】 ゆっくり、荒く呼吸する。多少は落ち着く】

はー……♡ はー……♡ はー……♡

【少し間をあけてから。

媚びた甘々な声で。照れ笑いで」

へへ。性欲やばい彼女でごめんね……♡

昨日もあんなにしたのに。

しばらく出来なかったとかでも、ないのに……♡

先生と居ると、すごい何（なん）か、身体の真ん中、っていうか……♡

すぐおまんこの奥、熱くなっちゃう……♡

【※1回※ キスする。ちゅぽとした、甘々なキス】

ちゅ♡」

〈主人公〉

「じゃあ、おまんこも気持ちよくなるっか♡」

主人公がにやにやとささやくと、イヴが嬉しそうに頷いた。

そのまま快感で潤んだ瞳をきらきらさせて、期待に満ちた目を向けてくる。

その間も胸はたつぷりと露出されていたが、Tシャツはずれ落ちる心配がない。

胸の上の位置で布が安定するほど、イヴの胸は大きいのだ。

「媚びた甘々な声で。今すぐ絶対セックスして、主人公に甘えたい」

うん♡

だからして♡

『して』が『ちて』になる」

今日も朝えっちちて♡

「甘々におねだりする」

お願い♡」

SE6 イヴがベッドの上で動く音

「最初から最後まで流す」

イヴが両手を後ろにつき、身体をそらせてさらに足を開いても、それは変わらない。

乳首は相変わらず硬くとがり、その胸はほぼ百パーセント見えたままだ。

その上、今は足の間までよく見える。

これ以上のセックス用ポーズはない。

その、あまりにも扇情的な姿に、主人公はいよいよ欲情を抑えきれなくなってきた。

● 中央 至近距離



「媚び媚びの甘えた声で。」

主人公に濡れた股間を見せるのが嬉しい。イヴには、ごくマイルドな『見せたがり』である」

ほら見て♡

ちゃんと見せるから見て♡

【めちやくちやに甘えた声で。小さな女の子が秘密を打ち明けるような感じで】

あのね？ おまんこもね？ やばいの。

【『さっき』とは『主人公が寝ている間、オナニーした後』という意味】

さっきちゃんと、拭いたのに。

【照れて恥ずかしそうに。でも言いたい】

先生と喋ったり、ちゅーしてるだけで、またぐちゅぐちゅになっちゃった……♡

【めちやくちやに甘える。小さな子供になって甘えている気分。一人称が『イヴ』になる】

ねえだから、して♡ 先生♡

待ってたイヴのおっぱいとおまんこ、気持ちくして……？

【※3回※ キスされる。『いいよ♡』と言われている感じの甘々に口をふさいでくるキス】

ん♡ んう♡ んー♡

【※3回※ キスされる。舌をゆっくり、ねちねちと絡めるディープキス】

れる♡ れる♡ れるっ……♡

【※3回※ ゆっくり、荒く呼吸する。  
興奮が最大値に達している】

はー……♡ はー……♡ はー……♡」

〈主人公〉

「じゃあイヴちゃん、お洋服脱ぎ脱ぎできるかな♡」

●中央 至近距離

「めちやくちやに甘えた声で。小さな子供になって甘えている気分」

うん♡ 脱ぐ♡

もつとちゃんとおっぱい出して、おまんこ見せる♡  
裸になって、えっち用のかっこになるからあ♡」

〈主人公〉

「……………♡」

SE7 イヴが服と下着を脱ぐ音

【最初から最後まで流す】

主人公、これから起こる事を想像するだけで、興奮のあまり、ずきつと頭に甘い痛みが走る。

まだ本格的に触っていなくても、キスと言葉のやり取りを繰り返して、イヴはここまできっと、従順になっている。

おまけに今、自ら全裸になって、主人公にすべてを差し出したのだ。

その素直すぎる態度に、主人公はぞくぞくするような征服感に満たされていた。だが、そもそもこの展開は、全てイヴの望み通りだ。

本当に従順なのは、主人公の方だと言っている。

じゃあ、わたしも思いっきり素直に、イヴちゃんの好きなようになってあげないとな。

主人公はそんな事を思いながら、大きく深呼吸した。

### ● 中央 至近距離

「【※4回※】 とろとろの甘い息を漏らす」

はあ、はあ、はあ、はあ……♥

【少し早口で、めちやくちやに甘えた声で。】

小さな子供になって甘えている気分。

『ここ』つまり性器を指で開いて『ここに指を挿入して気持ちよくしてほしい』とおねだりしている」

ほら見て♥ ここ、真っ赤になってるのわかるでしょ？  
『欲しいよー』ってばくばくしてるの、わかるでしょ？」

〈主人公〉

「えー？ 見えないなあ。

もっと開かないとわかんないかも♥」

だから、もう一押しだ。

主人公としては、ここでもうつついてもいい。正直な所、もう焦らさないでいじめたい。だが、それではイヴは物足りないだろう。

イヴは根っからのすけべでど変態だ。その上、そんな自分を全部見せてくれるほど、主人公を信頼してくれているのだから、中途半端ではいけない。

なので主人公は、もちろん全部見えているのに、しれっと嘘をつく。  
もっとイヴに過激な格好をさせて、愛情を確認し合って、過激なセックスがしたいからだ。

● 中央

「めちやくちやに甘えた声で。小さな子供になって甘えている気分。

見えていないはずはないと理解した上で、喜んでもっと過激な格好をしようとする」

嘘♥ うーそ♥ 絶対うーそ♥ 見えてるでしょ♥

『もっと開かないとわかんない』とかありえないから♥」

SE8 イヴが自分の股間をさらに広げて、主人公に見せる音

【最初から最後まで流す】

【少し大きめの音量で流す】

当然イヴも、その要求に喜んで従う。

イヴは臍内を見せつけて喜ぶ露出癖だから、今自分の性器がどんな事になっているか、本当は話したくて仕方ないに決まっていると、主人公が確信していた通りになった。

● 中央

「媚びた声でもどかしそうに。

先ほどまで焦らしているのは自分だったはずなのに、いつの間にか、すっかり自分が焦

らされている」

ほら♥ ここ♥

【指で性器を開いて、ここに指を入れてほしいとおねだりする】

先生が指入れるとこ、ここ♥」

〈主人公〉

「えっわかんない♥ どこかな♥」

なので主人公はもっとイヴに近づいて、欲望でぐちゅぐちゅに濡れた性器を覗き込んで、それでもなお、わからないふりをする。

実際そこは深すぎて、容易には触れない。もう少し解説してもらえるとありがたいのだ。

● 中央

「必死に、甘々に媚びた声で。

大喜びで、ノリノリで、今性器がどうなっているかを解説する。

『ぬるぬるとろって』は『ぬるぬるが、とろって』の略】

この♥ びらびらってなってるピンクのとその奥♥

指と指で開いてる、ぬるぬるとろって出ちゃってるとこ♥

【一呼吸おいてから。

ここから※マークまで、興奮のあまり少しずつつ早口になる。  
媚び媚びに、甘々に挿入をおねだりする】

ここ♡ ここに先生のほしいの♡

先生のお指出し入れして、Gスポとんとんしてほしいの♡

【ここから※マークまで、さらに必死に、甘々に、媚び媚びになる】

お願い♡

ねえお願い♡

【『ハメハメしてお願い♡』は『挿入してほしいです、お願いです♡』という意味で、区切らずに一気に言う。

『こやって』は『こやって』の略】

ハメハメしてお願い♡

いつもみたく仰向けで足自分で開いて♡ こやっておまんこ見せるからあ♡

ハメハメして下さい♡ お願い♡ ※

SE9 イヴが仰向けに寝転がる音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

そこで、とうとう焦れたのか、イヴが自分から仰向けになって、自分の手で足を持った状態で、大きく開いた。

主人公はこれにぞくぞくしながら、ようやく言う事を聞いてあげる。  
それにしても、普段、人を変態扱いしてからかってくる女の子のどすけべポーズは最高すぎる。

カメラに収める事はできないので、このように、定期的に直接見せてもらう事にしよう。

〈主人公〉

「いいよ♥」

SE10 主人公がイヴの性器に挿入する音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

● 中央

「高く甘い声で喘ぐ。ものすごく期待した、喜んでいる声で。  
これから挿入されるのがとにかく嬉しい」



あっ♡」

SE11 主人公がイヴの股間を愛撫する水音1

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【小さめの音量で流す】

【0―1秒ほどまで流してセリフ】

【▲1 で音量が一段階大きくなる】

【▲2 で速度が一段階早くなる】

【▲3 で速度がさらに一段階早くなる】

【そのまま、▲4 まで流し続ける】

● 中央

「興奮して、大喜びで。

主人公の指が膣口にあてられたので」

ん♡

【低くうめくように喘ぐ。指が挿入され始めたので】  
あ。

【高く甘い声で喘ぐ。ものすごく期待した、喜んでいる声で挿入されるのがとにかく嬉しい】

あっ♡

【とても低い声で濁音喘ぎする。めちやくちや気持ちいい】う。

”あっ……♡

【※4回※ ゆっくりと呼吸する。膣内の甘い圧迫感に耐えている。いきなり気持ちよすぎて、何とか耐えようとする】

ふう……ふう……ふう。ふう……♡」

▲1 ここでSE11の音量が一段階大きくなる。

●中央

【「高く甘い声で喘ぐ。ものすごく期待した、喜んでいる声で挿入されるのがとにかく嬉しい】

あっ♡

【「とても低い声で小さく喘ぐ。さらに指が深く入ってきたので、とにかく嬉しい】

あつ。きた。きたあ……♡

【少し間をあけてから】

入ってきたあ……♡

【低く濁音喘ぎする。ものすごく気持ちいい】

”あ。

【とても低い声で濁音喘ぎする。めちやくちや気持ちいい】

”あ。 ”あ……。

【※3回※ ゆっくりと呼吸する。

ものすごく気持ちいい】

はあ……はあ……はあ……♡

【※3回※ ゆっくりと呼吸する。

快感に必死で耐える】

ふう……ふう……ふう……。

【低くうめくように喘ぐ。指がとても気持ちいいところに、的確に収まったので】

ああつ……♡

【甘々に、とても嬉しそうに】

せんせえ……気持ちいい……♡ すっ……♡

【※3回※ 早めに呼吸する。

ものすごく気持ちいい」

はあ、はあ、はあ。

【※3回※ 早めに呼吸する。

ものすごく気持ちいい】

はー、はー、はー♥」

〈主人公〉

「動かすよ♥」

●中央

「甘々に媚びた声でおねだりする」

うん♥　ぐちゅぐちゅってしてえ♥」

▲2　ここでSE11の速度が一段階早くなる。

●中央

「低く濁音喘ぎする。最高に気持ちいい出し入れが始まったので」

” あ♥

★【※30秒※】低い声で、ゆっくりめのテンポでかわいく濁音喘ぎする。

声は最初は低く、だんだん高く、あまあまになる。

最初は同じテンポで、だんだんテンポが乱れる感じで、とろっとろになって喘ぐ。

主人公に好きなセックスを完全に把握されており、ものすごく気持ちいいテンポで、的確に出し入れされている感じで」★★★★★

”あ。 ”あ。 ”あ。

”あ。 ”あ。 ”あ♡

”あー。 ”あっ。 ”あ♡

”あ♡ ”あ♡ ”あ♡

”あっ♡ ”あっ♡ ”あっ♡

”あ♡ ”あ♡ ”あ♡

”あーっ♡ ”あーっ♡ ”あああ……っ♡

【※6回※】早めに呼吸する。

ものすごく気持ちいい】

はふ。はふ。はふ。

はふ。はふ。はふ……♡

【低くうめくように喘ぐ。『お』段の喘ぎが混じってくる。

ものすごく気持ちいい。相変わらず、完全に快感を管理され、激しすぎないペースで、

出し入れされているので」

あつ。あつ。あ。おつ。

あつ、あつ♥ あつ♥ おつ♥

あつ♥ あつ♥ あ♥ あ♥

【低く『お』の段で喘ぐ。気持ちよすぎて、軽くあへあへし始めている】

お。お♥ お♥ おおつ……♥

【※6回※ 早めに呼吸する。

出し入れされながら、なんとか喘ぎをこらえる感じ。ものすごく気持ちいい】

はふ。はふ。はふ。

はふ。はふ。はふ……♥

【※6回※ 早めに呼吸する。

ものすごく気持ちいい】

ふーっ、ふーっ、ふーっ。

ふーっ♥ ふーっ♥ ふーっ……♥」

イヴ、仰向けになって、主人公に一方的に気持ちよくされながら、いつしか夢中で腰を振り始める。

みつともなくがに股になって、そのくせ口元は、恥ずかしそうに手で隠しながら。

目を潤ませ、おっぱいをゆさゆさと揺らしながら、快楽に耽っている。

主人公は最高の気分だ。この光景を、毎日でも見たいと思った。

● 中央

「うわごとのように。あまりにも気持ちよすぎて」

せんせえ……気持ちいいよお……♡

気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい……♡

【甘々な声でうわごとのように。気持ちよすぎて、訳が分からなくなってくる。

主人公にも答えようのない質問を、そうとわかっていてする】

先生の何で？ 何で奥届くの？

長さ、私のとあんま変わらないのに♡

何でイヴじゃ届かないとこ入るの？

【※2回※ 甘々に喘ぐ】

あっ♡ あっ♡

【※6回※ 早めに呼吸する。

ものすごく気持ちいい】

はふ。はふ。はふ。

はふ。はふ。はふっ……♡  
うあ♡

【低く『お』の段で喘ぐ。

気持ちよすぎて、軽くあへあへし始めている】

おっ。お♡ おおっ……♡

【※6回※ 早めに呼吸する。

そろそろいきそう】

はー♡ はー♡ はー♡

はー♡ はー♡ はー……♡

【高くとろとろの声で喘ぐ。『先生』が『しえんしええ』になる】

ああああ……♡

しえんしええ……♡

【少し早口で、甘々の声で。もうまったく余裕がない】

やばい。やばい。やばいの。

【2個目だけイ『ぐ』になる】

イク。イク。イク。もうイク♡」

▲3 ここでSE11の速度がさらにもう一段階早くなる。



●中央

「★【※20秒※ 低い声でかわいく濁音喘ぎする。

声は最初は低くゆっくり、だんだん高く早くなる。

先ほどよりも余裕なく、思いつきり乱れる感じで、とろっとろになって喘ぐ。

主人公に好きなセックスを完全に把握されており、ものすごく気持ちいいテンポで、的確に出し入れされている感じで」★★★

”あ。 ”あ。 ”あ。

”あ。 ”あ。 ”あーっ……♡

はあ、はあはあ、あ♡

”あっ♡ ”あっ♡ ”あー……♡

”あっ♡ ”あっ♡ ”ああああ♡

”あーっ♡ ”あーっ♡ ”あああ……っ♡

【特に気持ちいいところに当たって】

”あー……♡

【甘々な声でうわごとのように。必死で、絶対伝えたい事を連呼する】

先生。好きっ、好きっ、好きっ……♡

気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい……♡

【特に気持ちいいところに当たって。もうイきそう】

” あー……♡

【『先生』が『しえんしええ』に、『好き』が『しゅき』になる】

しえんしええしゅき♡ しゅき♡ しゅき♡

【3個目だけイ『ぐ』になる】

もうイク。イク。イぐっ♡

【思いつきりガチイキ】

ああああああ……♡

▲4 ここでSE11がフェードアウトする。

SE12 イヴがベッドの上で動く音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「……………♡」

ここで、イヴが絶頂する。

主人公はそれを満たされた気持ちで見下ろしながら、でも優しく、注意深く彼女を観察する。

イヴは一度びつくん、びつくんと大きく震え、目を涙でぐちゃぐちゃにして快感の余韻に浸っている。

それは一見ぐったりしているように思えるが、主人公は知っている。この感じなら、まだまだ元気そうだと、これまでの経験で理解しているのだ。

そう。イヴには結構持久力がある。あるからこそそのセックス大好き女子なのだが、おかげで主人公は『持久力に優れた女性』と聞いただけで、なんだかえっちな気分になるようになってしまった。責任を取ってほしい。

だから、そんなイヴがこれからどうしてほしいのか、主人公には手に取るようにわかる。先ほど語った妄想のように『がつつり犯されたい』のだ。

それはもちろん、一回イった程度では『がつつり』判定されない。それなら……。

## ● 中央

「※6回※ 早めに呼吸する。

ものすごく気持ちいい」

はー♡ はー♡ はー♡

ふーっ♥ ふーっ♥ ふーっ♥

【※3回※ 少しゆっくり目に呼吸する。  
少し落ち着いてくる】

ふー……♥ ふー……♥ ふー……♥」

主人公、ベッドに仰向けになったままえっちな息を漏らすイヴに再び覆いかぶさると、そのまま、再び指を挿入する。

ぐちゅぐちゅにほぐれた膣の感触が指に伝い、それらがすぐさままた絡みついてくる。

SE13 主人公が再びイヴの性器に挿入する音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【小さめの音量で流す】

【0―1秒ほどまで流してセリフ】

【▲5 で速度が一段階早くなる】

【▲6 で速度がさらに一段階早くなる】

【そのまま、▲7 まで流し続ける】

● 中央

「再び挿入されて驚く。」

不意打ちだったので驚きの方が勝るが、本心では待ち望んでいた展開。嬉しくてたまらない。先ほどの妄想の通り、イヴは主人公に犯されたい願望がある」

” あっ……!?”

【※3回※ 『犯され感』強めに喘ぐ。

とても嬉しいが、まだ状況を理解できていない」

あ。あ。” あっ♥

【あからさまに期待しつつ、驚いて『待って』としか言えなくなる。

でも、本当はこのまま犯される事にもものすごく興味がある」

待って。先生。イッた。イッたからあ♥

【早口で必死に。

でも、どんなに抵抗しようと、このままもう一回イカされる事を理解している。また、ぜひそうなってほしい」

だめだめだめだめ、だめ♥」

▲5 ここでSE13の速度が一段階早くなる。

●中央

「低い声で小さく、でもガチ喘ぎ。

期待感と被虐心で、滅茶苦茶に感じてしまう」

“ あー……っ ♡

★【※30秒※】 低い声でかわいく濁音喘ぎする。

声は、最初は低く、だんだん高くなる。

まったく余裕がなく、一方的に気持ちよくされる。

これまでよりも激しく、めちやくちやにされている。

でも、それが嬉しいし、これ wait していたという感じで」 ★★★★★

“ あっ。 “ あっ。 “ あ。

“ あっ。 “ あっ。 “ ああっ……っ ♡

“ あー。 “ あっ。 “ あー…… ♡

“ あー…… ♡ “ あー…… ♡ “ ああああ ♡

あっあっあっあ ♡ “ あっ ♡ “ ああっ ♡

“ あ ♡ “ あ ♡ “ あっ ♡

“ あーっ ♡ “ あーっ ♡ “ あああ……っ ♡

【甘々媚び媚び声で。一見やめてほしい風だが、『先生』が『しえんしええ』『やだ』が『やら』になる】

しえんしええ……♡ 深い。深い。” あ。やら♡  
凄いの来ちやう、やだ、やだ♡ やら♡

【低い声で濁音ガチ喘ぎ。

期待感と被虐心で、滅茶苦茶に感じてしまう】

あっあっあっあっ。” あ。♡ あ、♡ あ♡

やばい。やばい。やばいから♡

【低い声で濁音ガチ喘ぎ。

一回一回が深く、重たく、めちやくちや感じているイメージ】

” あ♡ ” あ♡ ” あ♡ ” あっ♡

SE14 主人公がイヴにさらに深く覆いかぶさる音

【最初から最後まで流す】

▲7 ここでSE13の速度がさらにもう一段階早くなる。

主人公、挿入した指全部で膣の感触を楽しみながら、舌を見せて、イヴにもそうするよ  
うに無言で促す。

そしてイヴがそれを理解するかしないかのタイミングで、もう唇を奪い、キスしながらしっかりと攻める。

●中央 至近距離

「★【※30秒※】キスで口をふさがれながら喘ぐ。

キスは一方的で、攻められているイヴはうまく応じられないほど。

イヴはそんな『ラブラブにキスされながら、でも容赦なく攻められる』という最高のシチュエーションに、めちやくちや興奮し、大喜び。

これまでよりも激しく、めちやくちやにされている。

でも、それが嬉しいし、これを待っていたという感じで」★★★★★

んーっ♡んっ♡んっ♡んっ♡んー……♡んっ♡ふ♡んっ♡んー……♡んっ♡んっ♡んっ♡んっ♡んー……♡

【ガチイキする】

んんんんんう……っ♡」

SE15 イヴがどさっと倒れる音

【最初から最後まで流す】



イヴ、あっという間にまたイッてしまう。  
再びベッドにぐったりと倒れ、体力こそまだあるが、今度は欲求が想定以上に満たされ、  
感激して動けなくなっている。

●中央 至近距離

【※4回※】めちやくちやに荒い呼吸をする。

気持ちよすぎて、いきすぎて、息も絶え絶え】

はーひゅう、はーひゅう、はーひゅう、はーひゅう……♡

【※6回※】めちやくちやに荒い呼吸をする。

しかし、ひとつ前よりは息が整う】

はあ、はあ、はあ♡

はあ、はあ、はあ♡

【※1回※】キスされる。

甘々な優しい、ちゅぽつとしたキス】

ちゅっ♡

【甘々に抗議する。本当は、もちろんされたかった】  
もお。ダメって言ったのに……♡

【※3回※】キスされる。

今度は抗議を無視した、有無を言わせないキス」

ん♥ んっ♥ んーっ♥

【甘々に、にやにやと。本当は、もちろんとても嬉しい】

変態先生。やばかったあ……♥

こんなの♥ 私の嘘の話と変わんない位エロいじゃん……♥」

〈主人公〉

「うん♥ そうだよ♥ 変態だから変態セックスしたかったの。

ねえ。イヴちゃんがおっぱいゆさゆささせながら腰振ってるの、最高だった♥ すっごい可愛かったよ♥」

主人公、にやにやしながら素直に感想を述べ、イヴを照れさせてやる。

元はと言えば、直球すぎる言葉に困らされ、恥ずかしくなっていたのは主人公の方だった。

なので、付き合い始めて、やっと反撃できている気分である。

●中央 至近距離

【呆れている振りをしつつとても嬉しい。この言葉を聞きたかった】

はあ……♡

【甘々に抗議する。本当は、もちろんされたかった】

本当に恥ずかしい奴、好きなんだから。

【あからさまに声がうきうきしている。とにかくこれが最高だったの】

ダメって言うてるのにもう一回イカせるの、大好きなんだから♡

【少し間をあけてから。甘々に念を押す】

ねえ。先生とこんな変態セックスできるの、絶対私だけだよ♡  
一生していいから、絶対私とだけしてね♡

〈主人公〉

「もちろん♡」

●中央 至近距離

「【※3回※】キスされる。」

『もちろん』という気持ちを伝える、甘々なキス】

ん♡ んー♡ んーっ……♡

【上機嫌で】

ふふふふ♡ 先生大好き♡」

〈主人公〉

「わたしもイヴちゃんしゅき♡ しゅき♡ だーいしゅき♡」

●中央 至近距離

「【上機嫌で】

えー♡ 私のもっと好きだからあ♡」

〈主人公〉

「えー♡ わたしのがもっともっと好きだからあ♡」

こうして二人は早朝から濃厚セックスを終え、主人公は『まだ時間も早いし、これからもうひと眠りかな』と楽観視していた。

しかし、イヴの欲望は果てがなく、主人公の想像を時に凌駕する。

イヴは主人公にたっぷりと『好き』をプレゼントされて満足したかと思うと、今度は次の要求を放ってきた。

●中央 至近距離

「上機嫌で、にやにやと」

でさあ………♥

さつき先生、何でも言う事聞いてくれるって言ったよね………♥」

〈主人公〉

「うん♥ 何でも言っていييよ♥」

しかし主人公は、まだ事の重大さを理解していない。

イヴちゃんにおねだりされるのなんていつもの事だ！  
約束したし、今日も、なんでも聞いてあげよう♥

などと、完全に油断している。

● 中央 至近距離

「上機嫌で、にやにやと」

じゃあ、ちよっと聞いてもいい？」

〈主人公〉

「うん？」

SE16 紙を見せる『ぴらっ』という音

【最初から最後まで流す】

【ごく小さな音量で流す】

〈主人公〉

「……………！」

だが『それ』を見た瞬間、主人公の目は点になり、口は呆然と半開きになる。  
とはいっても、大した事ではない。見つかったところで大罪などではない。

だが、主人公は苦境に立たされた。

それは、バレてしまったらバレてしまったで仕方ないが……できる事ならバレたくない  
事柄だったからである。

なので主人公は、

——なぜ!? これは一体、どうやって流出したというの!?

と心の中でおののいてみるが、それすら長くは続かない。

『机の上に置いてあったのが落ちて、それをたまたまイヴが発見した』  
それ以外の可能性は、まずなかったからである。

### ●中央 至近距離

「にやにやと嬉しそうに。ちっとも怒っていない」  
さっき見つけたんだけど。

「一呼吸おいてから。にやにやと」  
これ♥ なーに？」

対するイヴは、嬉しそうににやにやしている。

どうやら今日はこれから、この紙を使って遊ぶつもりのようなのだ。  
では、その紙には何が書かれているのかと言うと、それは……。

とあるものの、購入記録である。

ここでフェードアウトして終了。